

# 火星



# 七曜抄

山尾玉藻

節分の舟屋に舟のもどりゐし

牡丹の芽マントの父の影の中

薄ごほり働く声のとびきたる

紅梅の向うざぶざぶ水遣ふ

きびなごのごつたがへせる春の雪

ポン菓子の鳴るたびに春あともどり

座布団は二つ折りなり鳥の恋

蟹満寺絵巻の芹の流れあり

大蘇鉄春の円座に見てゐたり

さくらさくら犀の尿のはじまりぬ

# 火星作品 山尾玉藻選

島影を大き舟出る二日風 兵庫 田中英子

をなご衆に日の届きをり初閨魔

寒紅が中央改札口出でく

色足袋の五体枯野をゆきにけり

獅子柚子の凸凹なると長湯せり

手鏡の房寝かせあり年の宿 八幡 飯塚 糸子

早梅や眼鏡かけたりはづしたり

百畳の上座下座の雪明り

人日や綿菓子立たせ出来あがる

くわんおんの御手に大寒横たはる

裏山に日イのかたまり笹子鳴く 大和郡山 城 孝子

山茶花の中に山茶花咲いてをり

南天につぎの羽音や寝正月

---

風揚げのはじめ青空たぐりけり  
からつぽの池にひよどり鬼やらひ  
風花や草木の匂ふ九十九折  
炎の中へ放る破魔矢の鈴鳴れり  
空いてゐる椅子に立掛け破魔矢なる  
鶏小屋の横を通りし梅見かな  
本棚に化石の置かる牡丹雪  
冬菜畑一畝は花咲いてをり  
河口まで松に沿ひゆく寒の晴  
檜の木の際の冬木ほの紅き  
三人の子の空き部屋の初明り  
あかときの破魔矢真直ぐ立ててゆく  
横座りして餅花を見上げをり  
煮凝や卓袱台にある脚四本  
土を掴みし盆梅の太根かな  
追儼会の生田の森に躓きぬ  
なやらひや鬼の衣装の重ねあり

西宮 米澤 光子

宝塚 杉浦 典子

神戸 深澤 鱻

---

# 選のあとに

山尾 玉藻

寒紅が中央改札口出でく 田中 英子

「寒紅」とは言え紅そのものは特に濃い訳ではなく、寒を冠した事や周りの状況などで濃いものと認識される。掲句を实景の世界に置き換えた時、大勢の人の中から「寒紅」の人を見極めるのは無理である。しかし読者はこの句に出会った時、既に詩の世界に移行している。「寒紅」が大写しにされてくるのは詩の世界、この作品に限らず現実世界と詩の世界は別ものである。「寒紅が」のがは俗っぽくて俳諧がある。

人日や綿菓子立たせ出来あがる 飯塚 糸子

綿菓子屋が遠心分離機のようなものを廻しながら一本の箸を「綿菓子」に仕立て上げ、待ち受けている子供に「綿菓子を立たせ」切つて渡すのである。「綿菓子」の在り様は立つていなければならぬ。季語「人日」の良し悪しはあるであろうが、初詣の一応さからは抜けている。

からつぽの池にひよどり鬼やらひ 城 孝子

節分会の神社の風景であろう。「鬼やらひ」とあるが行事の最中とはとらず晴れ渡つた節分の日と捉えた方がよい。池普請の為か神社の池には水が無く底が見え、「ひよどり」が来て尾を上下させている。一句に広がりを持たせ大きく詠むには、掲出句のように取合せの方が良い。節分の頃の季節感がある。

鶏小屋の横を通りし梅見かな 米澤 光子

梅林と言うものはもとより花を愛でるのが目的ではなく、梅の実を収穫するのが目的である。枝見と梅見との違いはそこにある。「鶏小屋の横を通りし」は正に梅見の世界である。心床しい懐かしさを覚える作品である。

横座りして餅花を見上げをり 深澤 鱈

まゆ玉や受験子ひとり居る家の 元田 千重

繭玉のあはひにありし涛の音 岡 和絵

「餅花」と「繭玉」は同じものながら語源は違う。「餅花」は穀物の実つた形であり実りへの余祝である。「繭玉」は養蚕の無難を託した祈りのものである。しかし実作者として実際

には余り語源には拘らない。「餅花」か「繭玉」かはその時の勘と言つて良い。掲出の三句共、間違ひなく季語が座つてゐる。この幹旋の勘こそが詩人たる所以である。鱧さんの句の「餅花」を見上げるのは「横座りして」程度の所作が似合つていて適當である。しかし「横座りして」の出しはやや思ひか、「座を少しずらし」ぐらいではなからうか。「餅花」に比べ「繭玉」の方がしんとした世界がある。千重さんの「受験子」の句はやはり「繭玉」に限る。和絵さんの句は実景としてよりも感覚としてよく解る。それなりに佳句である。

手を振つてそれが御慶という距離に 紡車洞

結社の選者と言うものはその人の人生を含めて選をする事になる。掲句、齡九十一の紡車洞とあつてこそその一句である。新年と言えどこのご高齢に特にあらたまつた感慨は無く、心身とも普段着のままである。いつもの人にいつものように「手を振つて」挨拶されたのだ。家内と道路ほどの隔たりに、そう言えば今年になって初めて会つたのだと思われたのだから。自由無碍の世界がある。

霜晴の二階喪服を着せ合へり 奥田 順子

昨年暮に母上の死に遭遇されたご様子で、その悲しみは一連の作品からしんと伝わってくる。今回の順子さんの作品を拝見し俳句の怖さ素晴らしさに改めて驚いている。大変失礼ながらこれほどの作品が作れる作家だったのかと思つたのが正直なところである。こう言う非常時に秀品を残せる作家は信頼できる。そんな中で掲句はやや息抜きのひと刻、うからやからの女性達の様子である。感情を抑えた句の裏にこそ真の悲しみが見えてくる。獅子座作品へ月あかく凍れる峽の葬ひとつの慟哭は本格である。

鶯や大和三山相寄れる 小池 楨女

大和盆地の田園の中に存在する三山は決して高くはなく床しい思いがする。それぞれが程好い隔たりに位置している。それでも実際の鶯の声は届かない筈であるが、掲句を見ると啼き交しているように思えるから不思議である。下五「相寄れる」の表現は見事である。(以下略)

玉藻俳句鑑賞

躑躅口のこして小鳥帰りけり 玉藻

〔火星〕平成十四年五月号より

躑躅にじり口は茶室にある小さな出入口のこと。普通の客は自然と頭を低くしにじって茶室に入るよう作られている。立ったまま入りできる貴人きにん口が別に設けられている茶室もある。

雁や鴨などの渡り鳥は春になると北方へ帰る。庭先に来ていた鶉や鶺鴒などの小鳥も北方や山中に帰ってゆく。「躑躅口のこして」は主観の強い確かな写生とと思う。

（典子）





# 恒星圈

大山 文子

臘梅や米寿の思案とびとびに  
枇杷咲くや遠見に味噌蔵醬油蔵  
父の口濡らしてこぼれ寒の水  
元日の月中天に暮れにけり  
この峰に晴子立ちぬし初景色

飯塚 糸子

祝はるる人祝ふ人懐炉して  
掛軸のマリア観音去年今年  
獅子舞の頭に振りをさむ  
蠟八や眉の形の竹矢来  
朝ごはんまで終はりし穂長刈

岡 和絵

一二歩の先の吹雪の腓かな  
寒鰯に塩打つ高さありにけり  
大いなる城の闇なり鬼やらひ  
男坂より鳥の目をして梅探る  
若菜籠畦に置きあり濡れてあり

伊藤多恵子

初日拝すと二階へ枕運びけり  
夫の髪みな白かりき初日受く  
わが窓の初日生駒山の初日  
臘梅の大壺にある安堵かな  
入院の荷の水仙の束なりし

奥田 節子

「ほほゑみの仏」のつべり冬日向  
衿立てて文字拾ひぬ塚の由  
いと小さき酒神に雲の凍てにけり  
利酒に赤ら顔なり寒四郎  
道なりに行けば戻りぬ芹の川

# 獅子座

山尾玉藻推薦

丸山 照子

うぶすなの波音を聞く初明り  
御降りやプールサイドに鴉ひて  
地に跪くことたのし若菜摘む  
鷺の佇つ渡し場見ゆる初句会

山田美恵子

楳白くなりたるまでを母のこと  
注連取つて帆のはらみたる漁舟  
福寿草主ちつとも起きて来ぬ  
大阪の日を受く塵に福笹に

高松由利子

鼻すぢに白粉のせて破魔矢受く  
繭玉にふれし男の写楽顔  
天窓の日射しに薺打ちにけり  
炭焼の炎色に染まる白はちまき

麦踏み of 折り返すとき天仰ぐ  
山鳩に好きな枝あり茂吉の忌  
襟巻をとらねばならぬ人に会ふ  
からだじゆうこころもとなき虎落笛

堀 義志郎

屋号札貼り付けをりし黒鮪  
ぼつぺんの頻りに笑ふ母娘かな  
冬の浪測り入港して来たり  
裏白の菱れ二人になりにけり

吉田康子

一ト駅 of 膝のぬくみの芹薺  
寒凧や茜に染まる竹生島  
年男嬰としつかり握手せり  
冬晴や空缶蹴つて蹴り上げて

大石芳三

雪が来て水仙の揺れ止みにけり  
雨あとを匂ひし冬の桜かな  
元日の軒端にありし車椅子  
去年今年鶏舎の奥に羽音あり